

先輩のこと、ずっと好きで
した——酔って零した一言
で、七年片想いの先輩に
今夜のすべてを奪われました
た

心臓が喉元まで迫り上がっている。

カウンターの向こうで揺れるキャンドルの光が、七年ぶりに隣に座った男の横顔を舐めるように照らしていた。

篠原蓮。大学の文芸サークルで二つ上だった先輩。ジャケットの袖を肘まで捲った前腕に腱と血管が浮いている。あの頃のひょろい身体はどこにもない。肩が広い。腕が太い。顎の輪郭が鋭くなって、目元だけが昔のまま——甘くて、ずるい。

「藤崎は変わんないな」

低い声が鼓膜を揺らした。石鹼に似た匂いが隣から届く。大学時代と同じ。この匂いを嗅ぐたびに鳩尾の奥がぎゅっと縮んでいたことを、身体が七年越しに思い出している。

「……先輩こそ。全然変わってないですね」

「嘘つけ。だいぶ老けたろ」

「目元が、同じなので」

言ってしまったから、見ていたことがバレたと気づいた。蓮がグラスに口をつけたまま、ほんの少しだけ目を細める。

結婚式の二次会。友人の香織は白いドレスで「選ばれた女」の顔をしていた。祝福した。心から。——でもその帰り道、ひとりでタクシーに乗る自分の姿が見えた。29歳。彼氏なし。最後に誰かに触れられたのがいつだったか、もう思い出せない。仕事を盾にして、空っぽの夜から目を逸らし続けてきた。

「彼氏は？」

不意打ちだった。グラスを持つ指先が震えた。

「……いません。ずっと」

「ずっと？」

「恋愛、向いてないみたいで。仕事ばかりだし——」

笑って取り繕った。いつもの台詞。これで済む。済むはずだった。
。

「向いてないんじゃないくて、最初から諦めてるだけだろ」

息が止まった。

蓮の目が、甘いまま、芯だけ鋭く光っている。

「——何で、そう思うんですか」

「お前の顔見りゃ分かる。昔からそうだった。欲しいものの前で先に自分から降りるんだよ、お前は」

グラスの氷がカラン、と鳴った。沈黙が落ちる。バーの喧騒が遠くなる。

凶星だった。ずっと諦めてきた。蓮のことも。恋愛そのものも。
「欲しい」と思うこと自体を。

「先輩のこと、好きでした」

口が勝手に開いた。

自分の声が、自分のものじゃないみたいに聞こえた。

言った瞬間、全身の血が引いた。七年間黙っていたのに。今さら。
。酔った勢いで。最悪だ。

「すみません、忘れてくだ——」

蓮の表情が変わった。

甘さが、剥がれた。その下から覗いたのは、抑えていた何かが破裂するような——切実で、苦しくて、熱い顔だった。

「俺も。ずっと」

「……え？」

「大学のと時から。卒業してからも。——今夜、二次会の出席者リストにお前の名前を見つけて、出席を決めた」

私のために、来た？ この二次会に？

「嘘——」

「嘘じゃない。お前のSNS全部見てた。直接連絡する勇気はなかった。後輩に手を出すのは卑怯だって、ずっと自分に言い聞かせてた。——でも、もう、無理だ」

世界が裏返った。

七年間「私だけに特別な目を向けてくれたことは一度もなかった」と思っていた。嘘だったのは蓮じゃない。私の認知の方だ。

蓮が私の手を取った。

大きい。硬い。現場で鍛えた手のひら。指の隙間から熱が流れ込んでくる。

「このビルの上にホテルがある。——嫌なら、言え」

嫌じゃない。嫌なわけがない。声が出ない。

代わりに、私の指が蓮の手を握り返していた。

蓮がそれを見た。目が一瞬、甘く歪んだ。

カードキーの電子音。暖色の間接照明。広いベッド。窓の外に都心の夜景。

ドアが閉まった瞬間、空気が変わった。

「酔ってるか」

「……少しだけ」

「嘘つくな。かなり飲んでただろ」

小さく笑って、蓮が私の頬に手を添えた。親指が頬骨をゆっくりなぞる。大きな手のひらに頬ごと包まれる。

——その指が、微かに震えていた。

この人も怖いのだ。七年分の想いが嘘じゃないか。今夜で壊れないか。確かめることが。

「キスしていいか」

奪わない。聞いてくれる。その一言で、鳩尾の奥の錠前がかちりと外れた。

目を閉じた。

最初のキスは唇を触れ合わせるだけだった。体温を確かめるような、おそろおそろの口づけ。蓮の唇は薄くて、乾いていて、熱い。

蓮の唇が離れかけた——その瞬間、私の手がシャツの胸元を掴んでいた。指が勝手に動いた。離れないで。まだ。

蓮が、私の指を見下ろした。

「……お前、ずっと我慢してたんだな」

声が低くて、甘くて、少し掠れていた。

七年間、誰にも触れさせなかった身体が、キスひとつで見破られた。

「そんなこと——」

「隠すな」

二度目のキスは深かった。蓮の舌が唇を割って入ってくる。口の中をゆっくり舐められる。丁寧なのに、奥の方に貪る熱がある。唾液が混じり合う音が自分の耳に届いて、恥ずかしいのに、頭がくらくらする。

「もっと口開けろ」

唇の隙間から低く囁かれて、逆らえなかった。自分から舌を差し出す。舌と舌が絡んで、蓮の唾液の味がした。微かにウイスキーの残り香。それが甘い。

蓮の手が背中に回った。ワンピースのファスナーに指がかかる。ジッ、と金属が鳴る。背中に夜気が触れて鳥肌が立った。蓮の手のひらが背骨に直に触れた。

——大きい。硬い。熱い。

現場で鍛えた手だ。その手が背骨を上から下へゆっくりなぞる。指先が脊椎の窪みをひとつずつ辿っていく。腰に到達した瞬間、甘い痺れが下腹まで落ちて、膝が折れかけた。

「っ……」

「大丈夫。倒れない。俺が持ってる」

腰を支えられたまま、ワンピースが肩から滑り落ちた。足元に布が溜まる。

白いブラとショーツだけの身体を、蓮が一步引いて見た。

視線が突き刺さる。

自分の身体に自信なんかない。胸は小さい。鎖骨と肋骨が浮いている。くびれもない。直線的な、色気のない——

蓮が片膝をついた。

私の腹部に唇を落とす。肋骨の際を唇でなぞり、臍の横に舌先が

這った。熱い。蓮の吐息が肌に当たるたびに産毛が逆立つ。

「ずっとこの身体に触りたかった」

「……きれいなわけ、ないでしょ、こんな——」

「きれいだよ」

蓮の声が低く、静かに、一切の揺らぎなく言い切った。

「大学三年の夏合宿。雨に濡れてTシャツが貼りついたとき、鎖骨から腰までのラインが見えた。あれからずっと——この身体を知りたかった」

七年前の、あの瞬間を。覚えているのか。

こんな身体を。あの一瞬だけで。七年間。

「美月」

名前と呼ばれた。「藤崎」でも「お前」でもなく。

その二文字だけで、身体の内側の温度が跳ね上がった。

蓮がブラのホックを外す。小さな胸が露わになった。反射的に腕で隠そうとした手首を、蓮が掴んでベッドに押さえつけた。力は強いのに、骨に当たらない精密さ。建物を設計するように、私の身体を壊さない力加減を知っている。

「隠すな。全部、俺に見せろ」

命令の声なのに、目が切なそうに歪んでいる。

逆らえなかった。

蓮の唇が胸に降りてくる。乳首に舌先が触れた瞬間、背中がびくんと跳ねた。舌が乳輪をゆっくり一周して、先端を唇で含んで——吸い上げられる。

「っ、あ……っ」

こんなに感じるとは知らなかった。自分で触っても何も起きなかった場所が、蓮の舌で目を覚ましていく。じわじわと奥の方に熱が溜まる。乳首の先から下腹まで見えない糸で繋がっているみたいに、吸われるたびにお腹の奥がきゅうっと締まる。

「声、殺さなくていい」
「っ……出したく、ない……」
「——本当に？」

蓮が乳首を舌先で弾いた。喉の奥から高い声が漏れた。自分の声じゃないみたいだった。蓮がかすかに笑う。

「いい声だ」

その低い声がまた背筋を舐め上げる。声だけで身体が反応している。こんなの、知らない。

蓮が片方の胸を唇で吸いながら、もう片方を指で摘んだ。親指と人差し指で挟んでゆっくり転がされる。硬くなった先端が指の腹に擦れるたびに、下腹にじんと甘い痺れが広がった。

「んっ……蓮、そこ……っ」
「先輩じゃない。蓮、って呼べ」
「っ……蓮……」

名前を呼んだ瞬間、蓮の唇が強く吸った。
声が出た。自分で止められなかった。

蓮の手が腹を下りていく。太腿の内側をゆっくりなぞる指先が、じれったいほど丁寧だった。撫でられるだけで肌が粟立つ。触れられていない場所が、触れてほしいと疼いている。

ショーツの上から、指が秘部に触れた。

蓮の指が——止まった。